繪本上袋集

186
357

186-357
1200800014537

186-357

はしがき

十幾年か前に露店で東都合巻上袋、東都合巻外題に記せる貼込帖二冊を見附け世の中には物好もあるものかなと思ひ求めて置きました。後に繪本の上袋十二枚を綴合せたのを道具屋より手に入れその中には明和の書目に載つてゐる繪本もあるのでこの方につり込まれ上袋の蒐集に可なり力を盡し繪入の分だけで百六十枚程集まりました。圖案家などはこれを見て出版して欲しいと申します。とう〳〵佛教藝術院主が引受けて下さることになり愈々モノになりさうです。他の方から本集に加へることを許して下さつたのが八圖あります。十九圖より二十二圖迄と二十六圖との五點は京都市會議員和田孝治氏、六十六圖は久原文庫、六十八圖と六十九圖とは京都帝國大學附屬圖書館の所藏であります書物の大さは色々ありますが第一圖以下の十二點と六十七圖とは半紙本、六十六圖は小本、その外は中本であります。四十一、五十、五十五、六十二の四圖は圖柄の都合で大きくしたに過ぎません。

書物の種類は一より十までは繪本、十一は讀本、十二は狂言本、即ち芝居の正本、六十二が人情本、六十五は狂句集、六十六は滑稽本、六十七は演義本、六十八、六十九は赤本その他は草双紙であります。尚ほ本集の編纂に就て藤井乙男博士が助言して下さつたこと、題簽の文字を吉澤義則博士が執筆して下さつた事を今こゝで御禮を申します。

編者しるす

大正
11. 4. 15
内交

目次

一　繪本花美棹　一冊、京都版
二　繪本武者英　二冊、京都版
三　繪本武勇丸　一冊、京都版
四　繪本富士錦　二冊、西川祐信畫、京都美濃屋平兵衛版
五　繪本名將勝色威　一冊、京都美濃屋平兵衛版
六　和漢猛獸合戰　一冊、京都美濃屋平兵衛版

七　新謎千代根草　幽篁軒畵
二冊、雪坑齋畵、大阪版

八　繪本風流覗唐操　下河邊拾水畵
二冊、白秀畵、大阪版

九　龕相笑顏門松　下河邊拾水畵
一冊、大阪勝尾屋六兵衞版

一〇　米澤彥八極樂遊　馬淵氏畵
一冊、大阪版

一一　傾城安榮錄
八冊、讀本、京都鶴喜版

一二　金門五三桐
五冊、狂言本、京都鶴喜版

以上十二部の書は明和より安永に亘り世に行はれしものにして、その中の四、七、八の三部は明和九年刊行の書目にこれを收めたり。彩色は何れも型紙を用ひて塗布せるなり

一三　修紫田舎源氏　第十八編　上
一四　同　第十九編　上
一五　同　第二十一編　上
一六　同　第二十三編　上
一七　同　第二十四編　上
一八　同　第二十五編　上
一九　同　第三十二編　上
二〇　同　第三十七編　上
二一　同　第三十八編　上
二二　同　見返し　上
二三　附同

三十、八編毎編四冊、種彦作、國貞畫、江戸仙鶴堂版、（文政十二―天保十三）紫式部の源氏物語を翻案せるものにして、舞臺を室町時代に取り、且つ當時の世相を寫したれば趣向複雑を究め世の評判を博せり。加ふるに國貞の畫もまた爛熟

せる世態を寫すに妙を得たれば、大奥の女に至るまでこれに心粋するに至り、後には發行を止められたりと云ふ、第三十九、第四十の二編は寫傳せられ、第四十一編以後は執筆するに至らざりしならん。

二三　正本製　初編上
二四　同　上三編下

十二編、毎編四冊乃至九冊、種彦作、國貞畫、江戸西村屋版（文化十二―天保二）芝居の趣向を草双紙に書きなせしもの。初編はお仲清七、二編は小いな半兵衛、三編は二代源氏時代物、四編はおきく幸助七役草、五六編は二ッ蝶々、七八九編はお染久松、十編以下は夕霧伊左衛門、花吹綱五郎なり。

二五　白縫物語　二十五編
二六　同　上四十九編

六十六編、毎編四冊、種員作、國貞畫。江戸藤慶版（嘉永二―明治十一）天草一揆に關することを作りなしければ筑紫の不知火を假りて題とせるなり。三十六編よりは仙果の作、二世國貞の畫なり、六十六編は種清作、芳幾畫にて明治十一年出版せしが完結に至らざりき。

二七　其由縁鄙乃俤　初編　英泉畫

二八　同　二十三編、毎編四冊、可候作、豊國畫、江戸仙鶴堂版（弘化四―元治元）
作者一筆庵可候は葛飾北齋の別名なり、第五編にて筆をとゞめ、種員及び仙果
その後を繼げり。　上　二編　同　上

二九　花封苔乃玉章　五編

十編毎編、四冊、春馬作、國貞畫、江戸紅英堂版（文久二―慶應二）

三〇　朧月猫乃草紙　初編

四編、毎編四冊、京山作、國芳畫、江戸榮久堂版（天保十三―弘化三）
室町時代に行はれし猫の草子に依りて書きなせるものなるべし。　怪異のことを
綴りしより外題書及び上袋にもまた奇怪の風物を顯はせり。

三一　釋迦八相倭文庫　初編　上

三二　同　二編

三三　同　四編　上

三四	同	上	七編
三五	同	上	十一編
三六	同	上	十二編
三七	同	上	十五編 廣重畫
三八	同	上	十六編 同上
三九	同	上	十七編
四〇	同	上	十八編
四一	同	上	二十二編 廣重畫
四二	同	上	二十三編 同上
四三	同	上	二十四編 同上
四四	同	上	二十五編 同上
四五	同	上	二十六編 同上

四六　釋迦八相倭文庫　二十七編　廣重畫

四七　同　上　二十八編　同上

四八　同　上　三十六編　同上

四九　同　上　四十一編

五十七冊、毎編四冊、萬亭應賀作、豐國畫、江戸上州屋版（弘化二―明治二）釋迦八相物語と題する繪入本八冊寛文六年に刊行せられしが更にこれを和げて草双紙となせるものを本書とす、趣向は近松門左衛門が賀古敎信七墓廻の燒直しに過ぎざれど草双紙流行の頃とて盛んに行はれ上州屋はこれに依りて巨額の資産を作りしと云ふ。明治に入りて世人この種の書を顧る者なく未完のまゝにて中絶せり。

五〇　稚源氏東國初旅　初編

種彦の修紫田舍源氏の好評を博せし爲め、これに乘じて作れるものなるべし。

五一　新編金瓶梅　三集上　南溟書

五二　同　上　四集下　南湖書

五三　同　上　八集上　抱玉書

五四　同　上　八集下　同上

十編、毎編八冊、曲亭馬琴作、國安畫、江戸甘泉堂版（天保二―弘化四）
支那小説中にて四大奇書の隨一と稱せらるゝ金瓶梅の翻案なり。水滸傳の一節たる妖婦潘金蓮の故事に趣向を取り文と想との妙を以て稱せられたり。

五五　女郎花五色石臺　初編上　英泉畫

五六　同　上　初編下　同上

五七　同　上　二編上　同上

五編、毎編四冊、曲亭馬琴作、豊國畫、江戸甘泉堂版（弘化四―嘉永六）

五八　大晦曙草氏　十八編

五九　同　上　二十編

二十編、毎編四冊、京山作、國政畫、江戸紅英堂版（天保十一）

六〇　當九字萬倍曾我　初編

六一　同　上　二版
三册、每編四册、魚文作、國輝畫、江戸青盛堂版（慶應二―三）

六二　秋雨夜話　前編
三册、每編三册、人情本、爲永春水作、口口畫、江戸二書堂版

六三　明鴉墨畫乃栰襠　三編　廣重畫
七册、每編四册、春馬作、國貞畫、江戸紅英堂版（文久二）

六四　兒雷也豪傑譚　七編　英泉畫
四十四編、每編四册、笑顏作、豊國畫、江戸甘泉堂版（天保十）
支那小説の我來也より出で鬼武の白來也説話となりしを更に飜案せしものなり。
十二編より四十二編までは種員四十三編より種清これを作る。

六五　新撰狂句圖會　廣重畫
一册、狂句集、

六六　太平樂卷物

六七　一冊、滑稽本、一鳥亭鳥馬作、江戸版（文政六）

六八　繪本忠經

六九　一冊、高井蘭山作、北齋畫、江戸版

高井蘭山は專ら通俗演義の類に筆を取れり。同じく北齋の畫を加へたるものに孝子嫩物語。新編水滸畫傳等あり。天保九年七十七にて歿す

同　はちかつぎひめ　上

同　下

室町時代の草子に依りて書き下せる赤本なり（是れ外題はちかつぎと題する畫なれど上袋に關係あればこれを收めたり、

解說

繪本は大体に分つて二種類ある。一は繪書を主とするもので他は文句を主とし繪書をこれに添へたものである。後者は繪入本とも云ひ習はせてゐる。印刷は文字物と繪書物との兩者より成るものであるが、書物と云へば通例は文字で記述したものとせられ繪書より成るものは特別の種類である、繪入本は古い所は暫くこれを云はずとも慶長・元和の頃に成れる光悦本や角倉本に例を求めることが出來る。少し降つて貞享・元祿の頃になると、江戸に菱川師宣、京都に西川祐信が出て盛んに繪本を作り世の好評を博した。畫家の名は傳はらないが、寛文の頃に出版せられた中村陽齋の『訓蒙圖彙』は通俗的繪本の濫觴と云ひ得るであらう。繪本は婦女童幼の玩弄の爲めに作らるゝし、實用向では繪手本雛形本の類がある。畫家なり染織家なり細工人なりがこれを參考して暗示を得るのは、世人が書物を讀んで智識を得ることゝ變る所はない。

玩弄品としての繪本繪入本も絶えず社會の要求があり、一枚繪などゝ共にこれを販賣する專門の書肆まであつてこれを地本屋または繪草紙屋と呼んでゐた。貞享二年刊行の『京羽二重』に繪草紙屋があり、元祿二年刊行の『江戸圖鑑綱目』に地本屋の名目がある。更に降つて安永の頃となると、地誌類にものでその由來する所古きを知るべきである。

名所圖會と稱する一種の繪入本が行はれた。

幼稚な物語を綴つて繪を加へた。赤本は洒落や諷刺を主とする黄表紙となり、文化の頃よりはこれに讀本と人情本とを加味した草双紙即ち合卷となつた。

黄表紙なり草双紙なりは挿畫に工夫を凝らしてあつたから、文句を讀まずに繪ばかり見てゐても仲々興味がある點で喜ばれたのである。であるから草双紙が盛んに賣れだすと文で賣れるか繪で賣れるかが問題となつたことが少くない。兎に角明和安永の頃より後は繪入本の全盛時代で、通俗的な書物は大抵繪入本であつた。繪本が盛んに行はるゝやうになると種々の點に意匠を凝らし、目に立つ口繪を加へたり、表紙や見返しに立派な

繪を施すやうになり、後には上袋に繪を應用することゝなつた。上袋の繪はつまり挿畫の延長と見ねばならぬ。吾人は上袋の由來に就て一考せねばならぬ順序となつた。

二冊以上の書物を本屋が取扱ふ時に離れない爲めと一冊の書物でも塵や手垢で汚れない爲めとで紙の被ひを用ふることゝなつた。これが謂はゆる上袋であつて、先づ〳〵速成の帙であるとも云ひ得る。最初は白紙で作つたが後には書名、冊數、著者、板元まで表面に刷込み、魁の朱印まで加へた。大抵枠があり、書名の兩側を線で區劃したり、又は書名を題箋のやうに線で圍むこともあるよりこれを轉用することもある。

何れの時代から用ひだしたかと云ふに、江戸時代でも餘り古い所にはこの刷込みのあるものはなく、寶暦頃より一般に用ひらるゝやうになつたらしい、古い所で年號の判然せるものとして吾人の數々見受くる所は明和以降のものが多い。刷込み上袋の用ひらるゝ前に白紙の上袋に題箋を貼り附けたものゝあつたことは事實であらう。

出版界の花形役者である所の繪草紙類は直にこの上袋を採用し、これに繪を加へた從來芝居の繪番附に繪入の表紙を附けたことや、赤本に貼り外題で繪を表紙に加へたことなどが繪入上袋の出現に關係があつたことゝ思はるゝ。

『繪本花美棹』以下の十二種は古人がこれを綴ぢ合せて保存したものであるから、大抵同時代のものと思はるゝのであるが、その中の三種まで明和九年の書目に載せてあるからその年代を知ることが出來る。何れも型紙刷と稱する方法で彩色を加へてある。明和年間より京阪地方で可なり盛んにこの彩色法が行はれたことを推定し得るのである。

型紙刷には染物に用ふる型紙の上から刷毛で彩色を塗る方法である。黄表紙又は青本と稱する草双紙の一種に袋入と呼ぶものがある。この青本は赤本の發達したもので江戸の名物であつたが、粗末な紙に刷つて五枚ばかり綴ぢ合せたものでいかにも貧弱に見えるそれで少々上作のものはこれを袋入として出版した。　袋入青本は明和六年喜三二作の『新板桃太郎』より始まつたと傳へてゐる。安永九年に開板せられた青本約六十種の內で

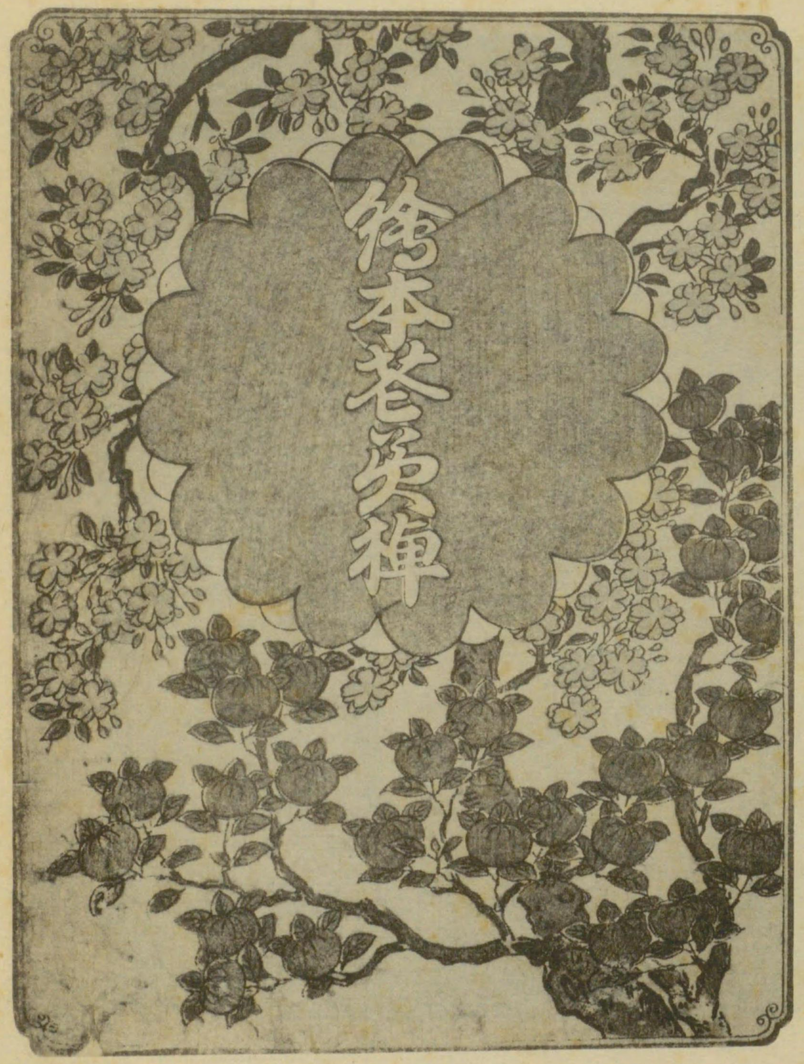
六種は袋入として出した。文化四年頃より青本衰へ合巻漸く勢力を得るやうになつたが上袋の使用は次第に盛んになつた。青本は貼外題であるが合巻は彩色刷の表紙を用ひ、兩巻の表紙を續き繪とするのが例である。

上袋は繪草紙屋の店頭にありて異彩を放つものでなければならぬ。それで草双紙の上袋には意匠を込めて作り上げたものが多い。文化文政時代の江戸人は却て何事にでも凝つたものであるが、繪草紙屋即ち地本屋となると殊に人後に落ちないやうに努めてゐたから上袋を見てもその氣性が現はれてゐる。その繪は多く圖案風で極めてあつさりとした所に妙味があり、一種の廣告繪として尊重すべきである。

上袋の繪には筆者を出したのも出さないのもあるが、何れにしても著名の畫家に請うて筆を取らしたものである。幕末の千社札に上袋の圖案を應用したものがあるそこで上袋の繪には優秀のものがあつたことを知ることが出來るのである。こんな風で草双紙即ち合巻は都て繪入の上袋を用ひたから、洒落本、讀本等何れもこれに習つて、立派な外觀

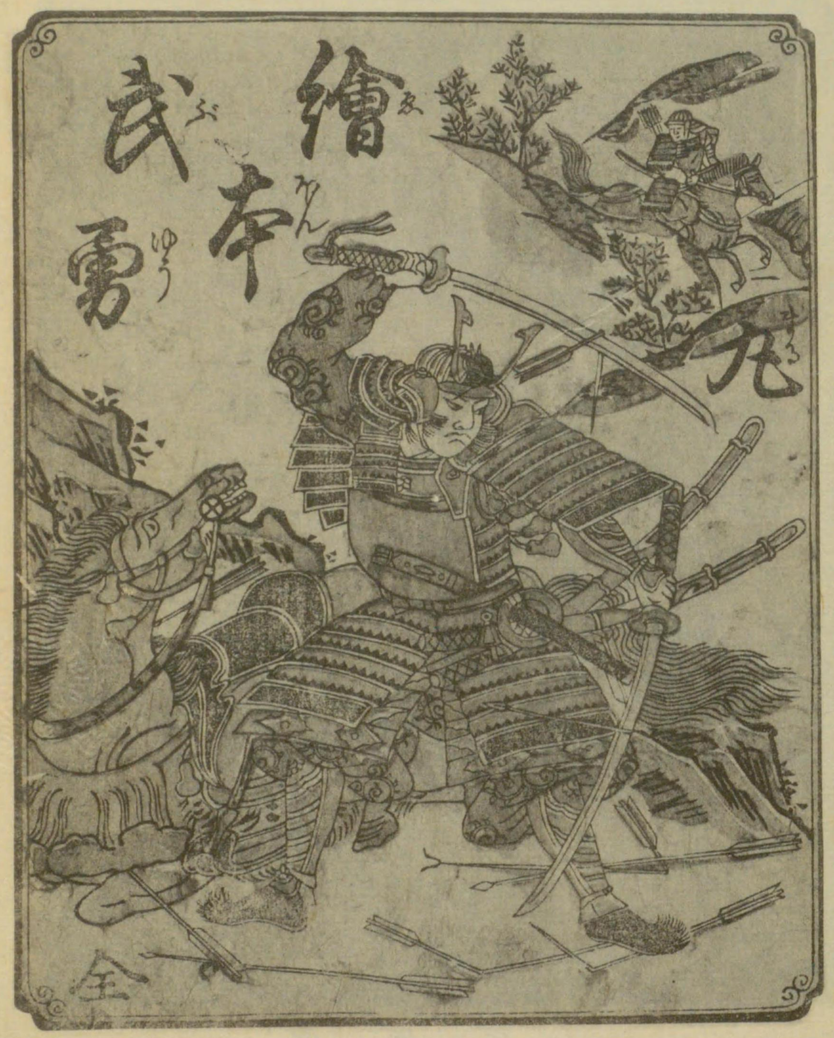
を有することゝなつた。

『江戸趣味』第四號に袋入青本のことを述べかゝれば内容は兎に角外袋は一番顧客の眼を惹き易いので、其意匠の巧拙や配色の優劣によつて、販賣上非常に影響を來す事となつた。それで草紙問屋では外袋を以て主眼とし、畵工を奬勵して各自獨特の手腕を揮はしめたのである。されば江戸時代に於ける彩色刷の袋は、宛然意匠と配色の競爭場で奇想天來の妙趣向には、今人をしてアッと云はせるものが多いと云つてゐる。誠にその通りである。天保の末年に水野越前守が浮世繪やこの草双紙の類に對し強壓手段を用ひたが、充分な取締が行はれなんだことはこれより後に出した釋迦八相倭文庫が幅を利かし明治の初年まで草双紙が跋扈したので知り得るのである。



第壹圖

第貳圖



第參圖

第四圖

第五圖

第六圖

第七圖

第八圖

第九圖

第拾圖

第拾壹圖

第拾貳圖

第拾參圖

第拾四圖

第拾五圖

第拾六圖

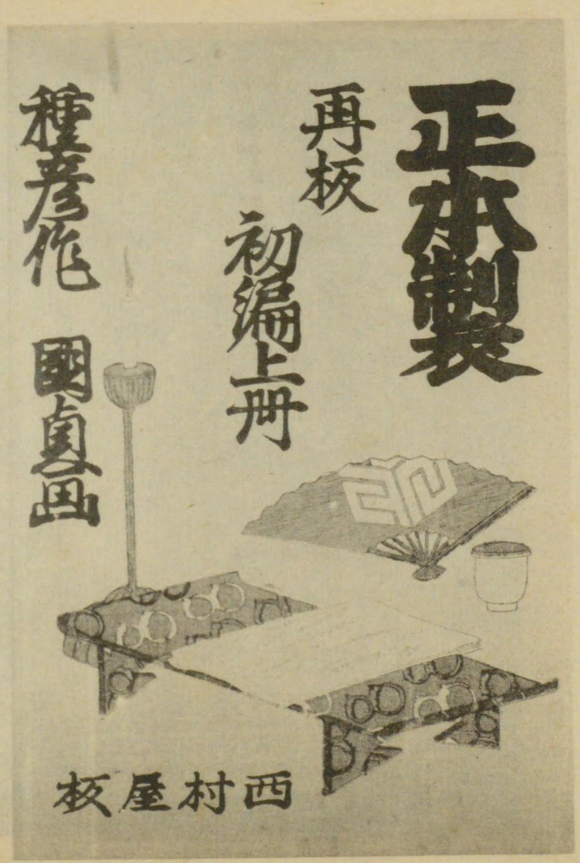
第拾七圖

第拾八圖

第貳拾圖

第貳拾壹圖

第貳拾四圖



第貳拾參圖

圖六拾貳第

圖五拾貳第

第貳拾八圖

第貳拾七圖

第拾參圖

第拾貳圖

第參拾壹圖

第參拾貳圖

第參拾四圖

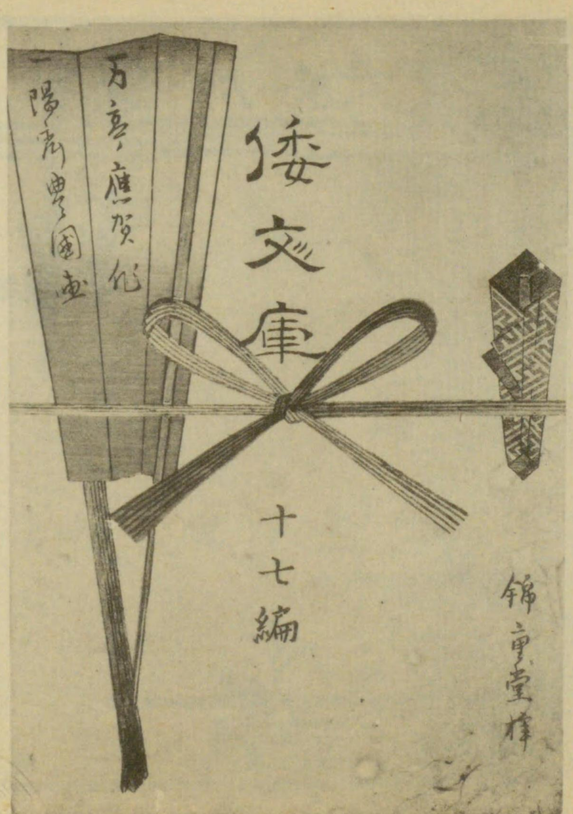
第參拾參圖

第參拾五圖

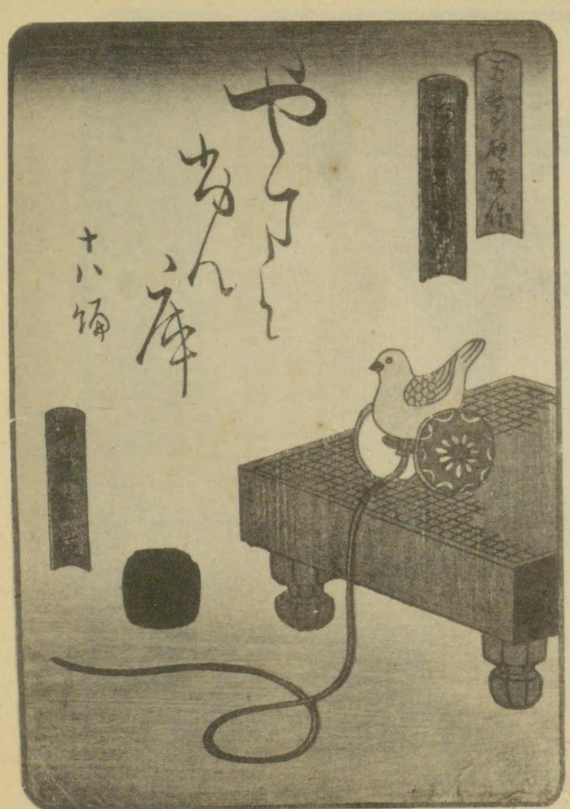
第參拾六圖

第參拾八圖

第參拾七圖



第參拾九圖



第四拾圖

第四拾壹圖

第四十四圖

第四十三圖

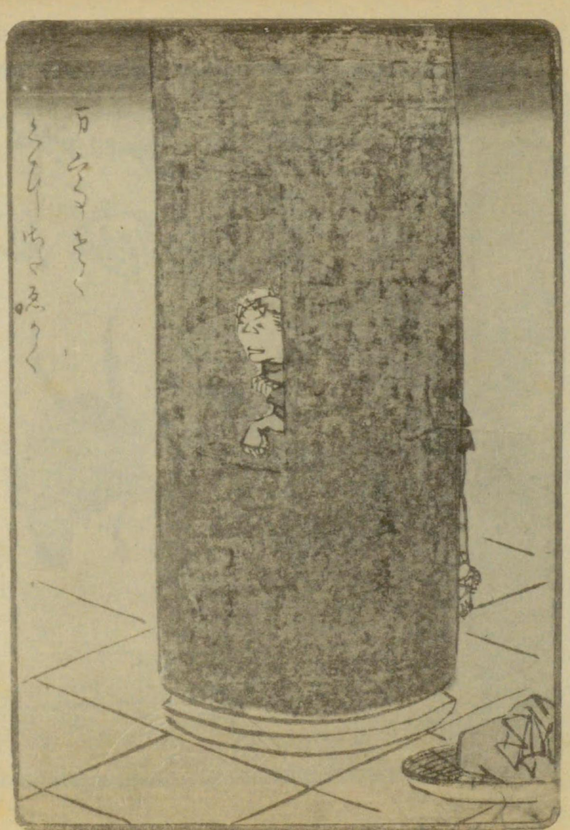
第四拾四圖

第四拾五圖

第四拾六圖

第四拾七圖

第四拾九圖

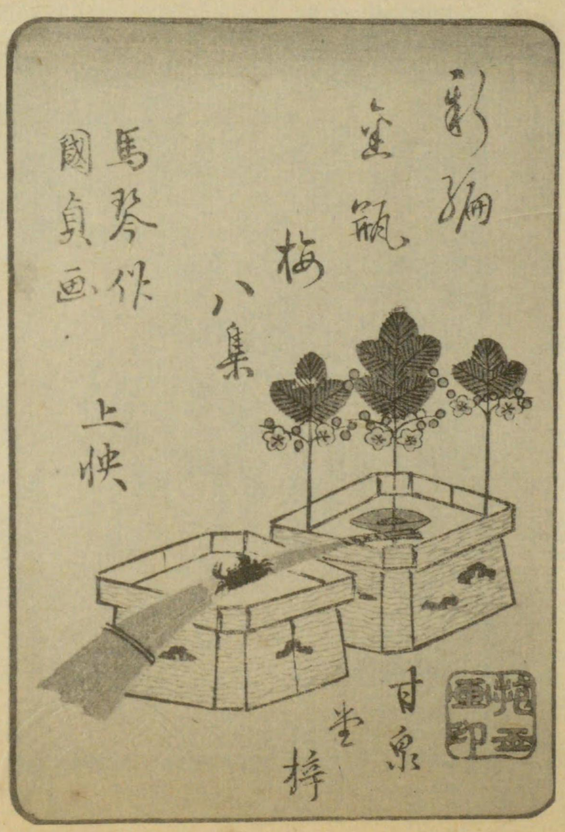


第四拾八圖

第五拾圖

圖式拾五第

圖式拾五第



第五拾參圖

第五拾四圖

第五拾五圖

第五拾六圖

第五拾七圖

第五拾八圖

第五拾九圖

當九字
萬成
曾我
二編
假名恒魯文錄
一雄齋國輝畫
竹榮濤治校
青盛堂
壽梓

第六拾壹圖

當九字
万倍
曾我
初編
魯文錄
桃壽校
國輝畫
青盛堂梓

第六拾圖

第六拾貳圖

圖四拾六第

圖參拾六第

第六拾五圖

第六拾六圖

第六拾七圖

第六拾八圖

第六拾九圖

186
357

大正十一年三月廿五日印刷（繪本上袋集）
大正十一年四月一日發行　賣價金參圓八拾錢

京都市下京區櫛笥通七條上ル花畑町
編輯者　禿氏祐祥

京都市油小路下立賣南入
發行兼印刷者　中野彌吾

京都市竹屋町河原町東入
印刷所　野村工場

京都市油小路下立賣南入
發行所　佛教藝術院
振替口座京阪五一二〇六番